

# EMPATHY

KYUSHU ROUSAI HOSPITAL

vol.1



九州労災病院における人工関節手術

小児医療への取り組み

—— 小児科

—— 河野勤



九州労災病院は、このたび、新たな挑戦として広報誌「EMPATHY」を創刊しました。この広報誌は私たちが大切にしている信念と価値観を皆様にお伝えする貴重な媒体となります。

私たち九州労災病院のスタッフは、医師と患者さんの関係が同等であるべきだと考えています。医療は決して一方向の営みではなく、双方の信頼と共感に基づくパートナーシップに他なりません。もちろん、私たちは最高の医療を皆様にお届けすることを使命としています。

しかし、よりよい治療効果を得るためには、患者さん自身が積極的な治療への意欲を持ち、ご家族の理解と支援があることが非常に重要だと考えています。

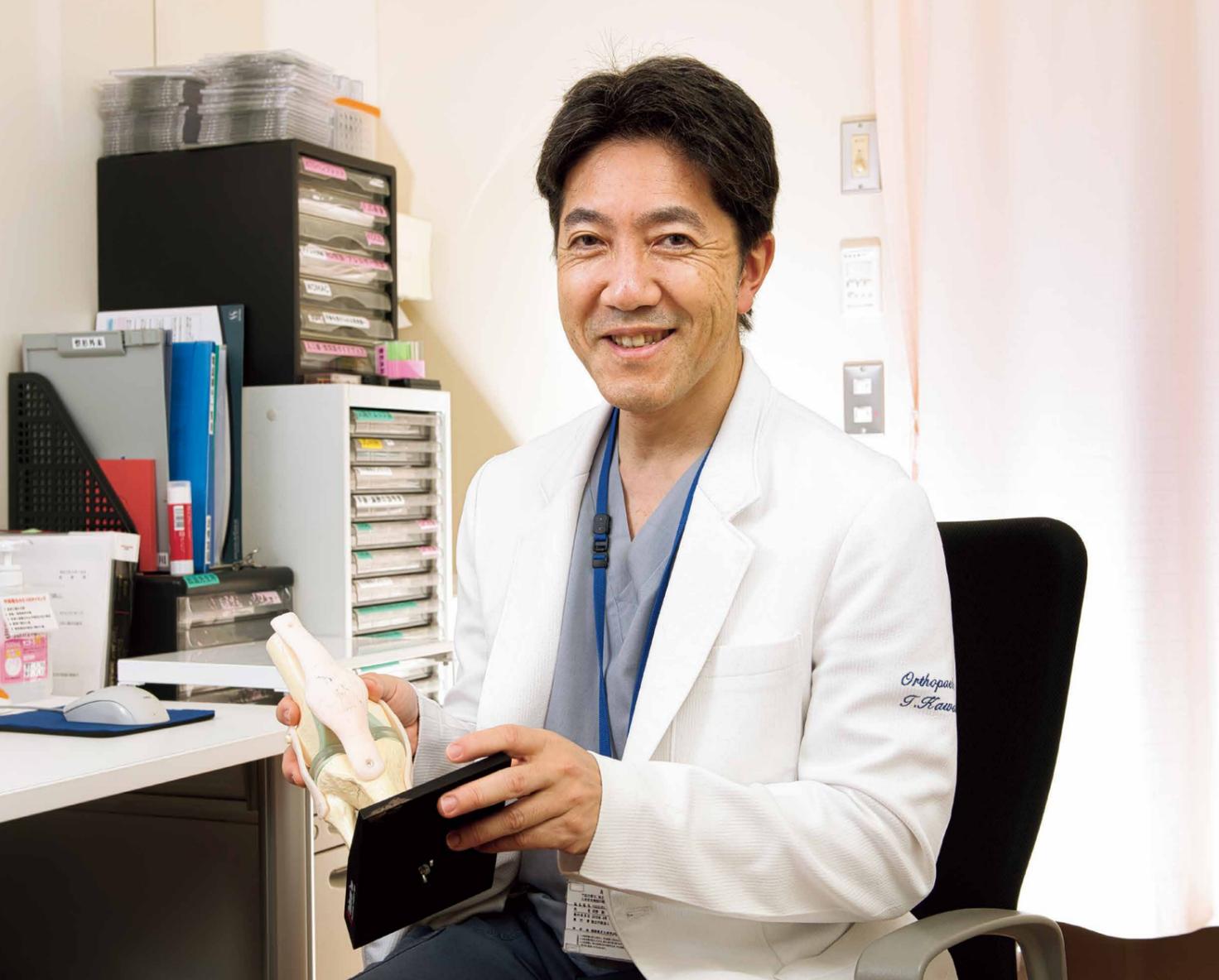
だからこそ、私達は「患者様」という形式ばった表現を避け、医師と患者さんが共に手を取り合いつつ、

最高の治療を目指して協力して病気に立ち向かっていくことを望んでいます。

「EMPATHY」では、私たちの考えを具現化する形で、当院の医師やスタッフのエピソード、医療情報、患者さんへのメッセージなどを定期的に掲載していきます。この誌面を通じて医療現場における共感と思いやりの文化を醸成すると共に、医師と患者さんとの関係性に新たな価値観を提示し、共感の輪を広げていきたいと考えています。

私たちは、この広報誌を通じて皆様とのコミュニケーションを強化し、よりよい医療の提供に繋げていくことを目指しています。九州労災病院と「EMPATHY」が、皆様の健康と安心に寄り添い、共感を生み出す存在であり続けられるよう、これからも全力で取り組んでまいります。

九州労災病院 院長 三浦裕正



とで早期から積極的にリハビリを行うことを可能とし、術後の拘縮(膝が固くなること)予防に努めています。

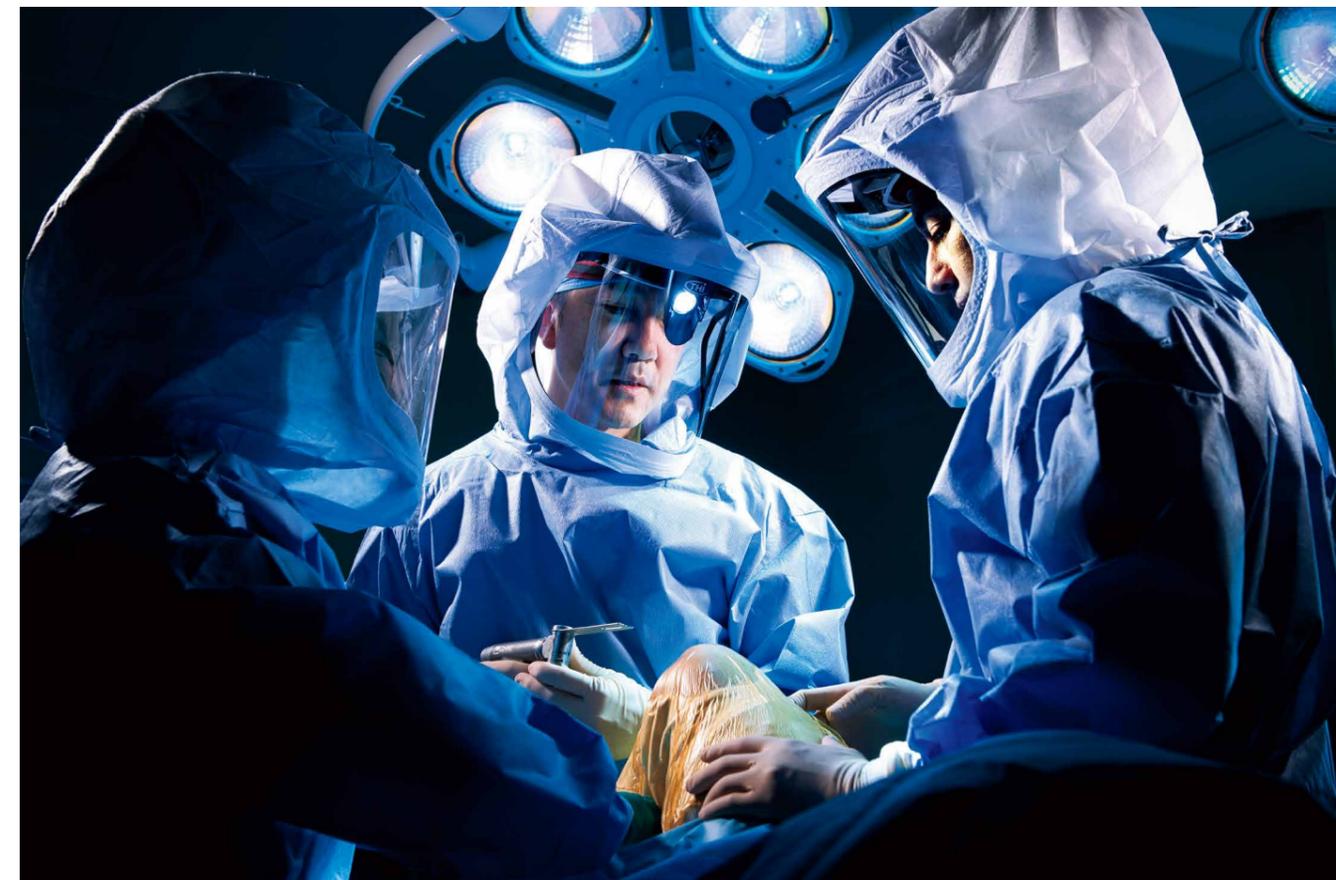
人工股関節では、高度変形や脚長差(手術を受ける脚が短い)を有する症例にも対応できるよう全症例に患者さん個々の骨形態に応じた3D計画を立て、CT画像を用いたシミュレーションを行い適切なインプラント設置と脱臼予防に努めております。そしてそれらをより正確に反映するため術中画像支援ツールやナビゲーションシステムの使用にも取り組んでいます。

### 更なる改善で 感染ゼロを目指す

一方で人工関節は金属インプラントを用いるため感染には細心の注意を払わなければならない

手術です。当院ではバイオクリーンルーム(空気中の細菌が無菌に近い手術室)や、全身排気スーツ(落下細菌を防ぐ手術服)を使用し感染リスクを最大限に減らす対策をとり極めて低い感染率を達成しておりますが、今後も感染ゼロを目指し更なる改善に努めてまいります。また手術により早期機能回復および社会復帰を目指すことに努め、組織を痛めずに手術を行うMIS (minimally invasive surgery) にも取り組んでおり、人工膝関節、人工股関節どちらも2週間程度の入院でご自宅への退院いただけるよう看護、リハビリの両面からもサポートを強化しております。

関節の痛みでお困りの方、またそのような患者様を診療されている先生方におかれましては、お困りの際は一度ご連絡、受診いただき、皆さんが笑顔で生活を送れる助けに少しでもなればと思います。



## 九州労災病院における人工関節手術

整形外科部長 河野 勤

### 人工関節について

人工関節とは、変形性関節症をはじめ様々な病気のために関節の痛みが生じ、日々の生活でも苦痛を感じ支障を来すようになった方に対する手術治療です。除痛(痛みをとる)効果に非常に優れた方法で、当院でもかねてより積極的に取り組んでおり人工膝関節、人工股関節それぞれ年間

200件以上と全国有数の豊富な手術実績を有しております。

人工膝関節では、痛みをとるだけでなく機能的な膝に再建することを目指しており、術後によく曲がる膝や安定性の高い膝が獲得できるよう様々な工夫をしております。さらに術中カクテル注射(複数の薬剤を混合した注射)や各種ブロック注射を行い術後になるべく痛みを生じないようにするこ

小児科副部長  
小川 将人

院長  
三浦 裕正

小児科医師  
多久 葵

小児科医師  
河原 風子

## 小児医療への取り組み

院長  
三浦 裕正

小児科副部長  
小川 将人

小児科医師  
多久 葵

小児科医師  
河原 風子

**院長** 「EMPATHY」の創刊にあたって、最初に誌面を飾って頂くのは、小児科の新進気鋭の3名のドクターです。それぞれが、特色を活かしながら、小児科の広範な領域をカバーしてくれています。本広報誌のタイトルかつ基本的理念でもある医師と患者さんの「共感」に思いを馳せながら、3名のドクターの人間像に迫りたいと思います。

### 他科との強い連携

**院長** 小児科は多岐に渡る専門分野がありますが、まず各々の専門領域について教えていただけますか？

**小川** 私の専門は感染症です。

**多久** 私は内分泌症に特化しています。

**河原** 私は小児科全般に対応しています。

**院長** 河原先生は、まだ、小児科のさまざまな領域で研修中ということですね。心身症や児童精神科学といった精神的な領域にも関心がおありのようですね。ところで複数の専門分野を持つ医師はいらっしゃいますか？

**小川** はい、存在します。一般的な領域である小児科は、複数の専門性を持つ医師が非常に効果的に活用できる場です。私の場合、感染症と救急医学、さらに消化器や肝臓疾患の治療にも取り組んでいます。

**院長** すべての疾患を診ることができる医師はいらっしゃいますか？

**小川** 小児科は多くの場合、子どもの疾患の入り

口となるため、広範な疾患知識を持つことが重要であると考えています。

**院長** 小児科医は、全身を診る必要があり、多くの臓器系を理解しなければならないため、学習項目が多いと思われます。多様な診療科との連携も必要でしょうね。

**小川** 当院は他科との協力が強力なため、小児科の診療は非常にやりやすい環境だと感じています。

### 小児科はジェネラリスト

**院長** 私たちの九州労災病院の小児科は、専門性と個々の特色が3人体制により鮮明に表れています。それぞれの先生が、どのような視点から小児医療に取り組んでいるのでしょうか？

**小川** 当院の特長の一つとして、我々が特に力を入れている内分泌領域が挙げられます。その一環として、多久先生が素晴らしい研究と治療を展開しています。また、河原先生の存在が大きいです。彼女は内科的な疾患から精神的な疾患、また明確な診断が

つかない子どもたちまで、幅広い領域の子どもたちをケアしてくれています。

**院長** それは興味深いですね。内分泌とは具体的にどのような疾患に対応しているのでしょうか？

**多久** 当院では、主に低身長、肥満痩せ、糖尿病、思春期異常の治療に力を入れています。2016年から北九州市では学校健診で体格異常が見つかった子どもたちに対して、病院での診察を奨励する制度が始まったこともあり、これらの疾患の診療件数は増加傾向にあります。

**院長** 低身長の症例については、骨系統疾患などの整形外科的な問題も絡んできますよね。そのようなケースに対してはどのような連携をとっているのでしょうか？

**多久** そうですね。例えば、側弯症による低身長の子どものためには、整形外科とコンサルテーションを行いながら治療を進めています。逆に整形外科からの紹介で、骨のX線異常や気になる症状がある子どもたちを診察することもあります。

**院長** 河原先生は、これまで精神科や心療内科で診療されていたような子どもたちを、小児科医として診ているのでしょうか?それとも新たな領域の疾患群なのでしょうか。

**河原** 私が診ているのは、どちらかと言うと"グレーゾーン"の子どもたちです。診断がつかなくて精神科に行けないような子どもたちが多くいます。たとえば、朝起きられない、お腹が痛いといった症状を持つ子どもたちです。診察を進めると、家庭環境の問題や、極端な偏食、さらには甲状腺機能の異常など、さまざまな原因が見つかります。一見、怠けているように見える子どもでも、問題の解決に繋がることがあるのです。

## 小児救急について

**院長** 九州労災病院では、私たちは日中に小児救急医療を提供しています。その実施についての感想をお聞かせ下さい。

**小川** 我々の小児救急事例の数はまだ決して多いとは言えません。しかしながら、救急車で運ばれてきた患者さんの中には、我々が初期対応をしなかつ

た場合、その後の病状がどう変わっていたかという事例も存在します。それだけに、救急対応の重要性を痛感しています。

**院長** 救急車で搬送されてくる患者さんの主な疾患は何でしょうか?

**小川** 我々の統計によれば、痙攣疾患が最も多いと言えます。

**院長** その際、まずは薬物投与により痙攣を止めるという対応になるのですね?

**小川** はい、その通りです。特に痙攣が継続している場合には、注射や薬物で痙攣を止め、その後は入院して経過を観察する流れとなっています。

**院長** 感染症による高熱が出た患者さんも救急車で搬送されることはあるのでしょうか?

**小川** 単純に感染症による高熱だけで救急搬送されるケースは少ないです。しかし、意識が朦朧とした状態や熱せん妄を起こしている場合は救急車で搬送対象となります。

## 小児科医師としてのやりがい

**院長** 小児科医師としての醍醐味はどのようなときに感じられますか?

**河原** 子どもたちは回復力が強く、その力を元気になって帰る子どもたちの姿に見ることができます。このような劇的な変化を見ることが、私たちの仕事のやりがいとなっています。

**多久** 私が介入したことで状況が改善したとき、その変化を確認することです。患者さんの大半が慢性疾患を持っているため、治療の結果、今までの生活が送れるようになった患者さんやその親御さんの安堵の表情を見ることが、私のやりがいとなっています。

**院長** 内分泌疾患の治療は時間がかかることが多く、大人になるまで治療が必要なケースも多いと思います。その際、小児科から成人診療科への移行はスムーズに進みますか。

**多久** 大人になるころには内科に移ることを患者さんに説明しています。例えばターナー症候群の女性の方は、産婦人科の初診の時に、女性医師に対応してもらえるかを尋ねたり、医師の診察に同行したりしています。これらの努力により、スムーズに診療を移行できていると思います。

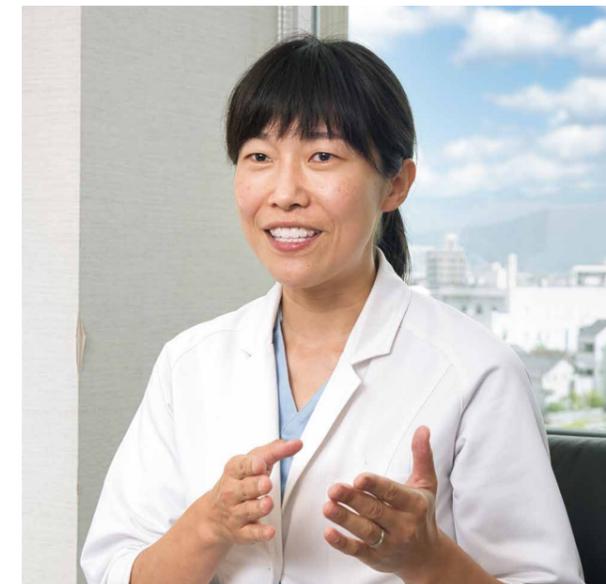
**院長** 私は整形外科医ですが、研修医時代に小児と大人は骨格も関節の作りも全く違うということをしっかり叩き込まれます。小児科医としても同様の認識を持っていますか。

**小川** その通りです。特に、薬の使用に関しては、体重に基づく精密な計算が必要となります。侵襲的な手技を伴う場合には、子どもが恐怖を感じないようにすることが、小児科医師としてのスキルの一つであると考えています。

**院長** 多岐にわたる質問を投げかけてしまい、それが回答を難しくしたかもしれません。しかし、それが良い対談に繋がったと思います。これからも九州労災病院の小児科を皆さんで引き続き盛り上げていただければと思います。本日はありがとうございました。



小川 将人 感染症/小児科全般(2007年卒)



多久 葵 小児内分泌/小児科全般(2012年卒)



河原 風子 小児科全般(2017年卒)



三浦 裕正  
院長/膝関節外科(1982年卒)



Kyushu Rousai Hospital

独立行政法人労働者健康安全機構

# 九州労災病院

Kyushu Rousai Hospital

〒800-0296

北九州市小倉南区曾根北町1-1

☎093-471-1121

九州労災病院ホームページ ▶

